



営農情報

第81号 平成31年3月5日

「あまおう」3月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

1 生育状況

2番果房は、暖冬傾向のため生育が促進されたことで、2月上旬から中旬にかけて出荷量が増加し、現在、終盤となっています(図1)。

3番果房も、早期作型、普通作型ともに過去2か年と比較して早い出蕾となっており、一部のほ場では出荷が始まっています(図2)。

病害虫については、ハダニ類やアブラムシ類、うどんこ病の発生が増加しています。

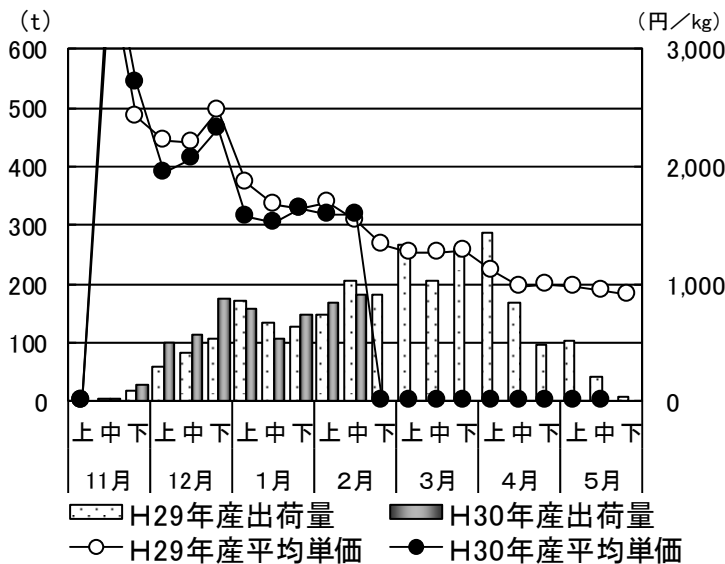


図1 J A福岡大城イチゴの総出荷量と平均単価の推移

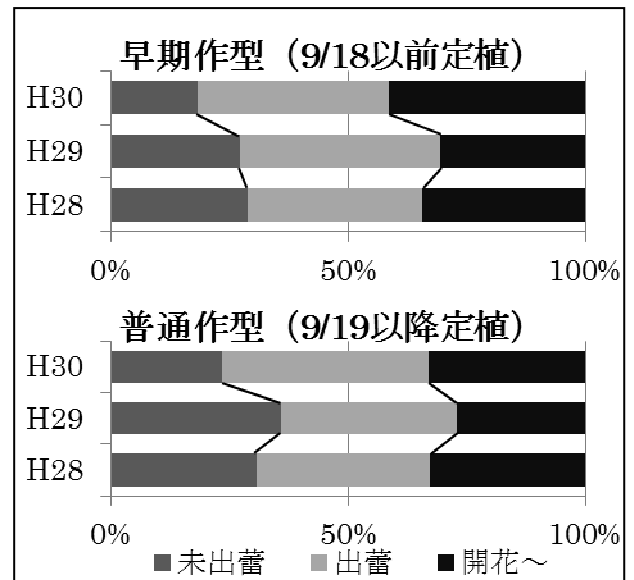


図2 3番果房出蕾状況(調査期間:1/30~2/7 南筑後普及指導センター管内)

2 気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区気象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

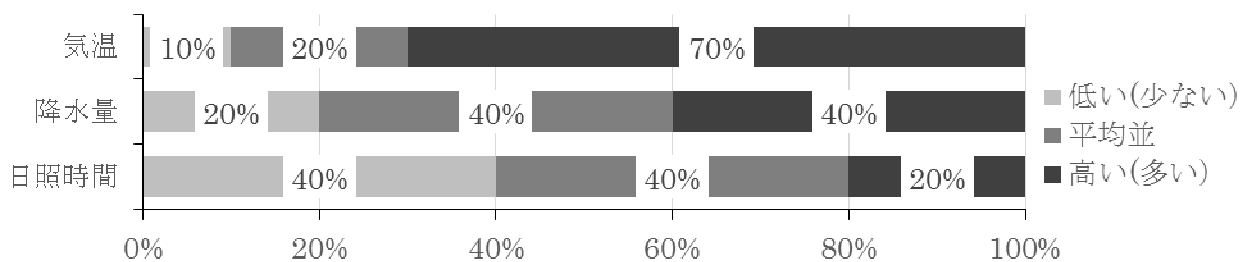


図3 1か月予報 (九州北部地方 予報期間:3月2日~4月1日 発表日2月28日)

(2) 今後の見通し

天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が少ない予報です。平均気温は、平年より高い確率が70%で、降水量は平年並み、多い確率がともに40%です。急な株の立ち上がりや灰色かび病・ハダニ類・アザミウマ類の発生が懸念されます。ハウスの換気に気をつけ、病害虫の早期発見、早期防除を心がけましょう。

3 今後の管理

<ポイント>

心葉は立ち上がっていますか？2番果房の着果負担のかかっている株も見受けられます。温度、電照管理、換気等で調整しますが、3番果房が連続して出蕾しており、養分競合や果実肥大不足が懸念されます。今後、出荷量が増えてくることが予想されますので、草勢（株の状態）をみて管理しましょう！

(1) 温度管理

- 日中は、サイド・谷・妻面を開放して換気を行い、低めの温度管理を行う。
- 夜温7℃以上の日は、夜間もハウスを開放したままにする（雨天日を除く）。

表1 3月以降の温度管理の目安

午前	午後	夜間
18℃～20℃	18℃以下	5℃（夜温7℃以上は開放）

(2) 電照管理

- 草勢を見ながら徐々に電照時間を短くし、3月中下旬を目安に心葉の展開が外葉より高くなりかけたら終了する。
- 着果負担のかかっている株で心葉の伸びが悪い場合は、電照時間はそのまま様子を見、心葉が伸びてきたら短くしていく。
- 電照終了後、心葉の伸びが悪くなった場合や、展葉速度が極端に遅くなった場合は電照を再開する（2時間程度）。

(3) かん水

- 少量で回数を多く行う（1回当たりのかん水量が多いと、収穫時の果実傷みの原因となるため）。
- かん水の目安は、pF値1.7～1.8とする（朝、葉つゆをうたないようであれば土壌が乾燥している）。
- 果実品質維持のため、収穫直後に行う。
- 水分不足は、果実肥大不足や乾燥によるダニ類の多発要因となりやすいので注意する。

(4) 施肥

- 液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。
- 3月末を目安に施用を終了する。

(5) 株整理

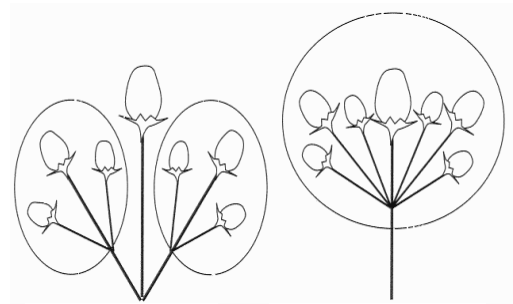
- 収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房の出蕾促進のため速やかに除去する。
- 枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。

(6) 摘果

- 3番果房の摘果は、果梗の形に応じて行う。また、草勢が弱い場合（心葉の葉柄長9cm以下）は着果数を減らす。

【 1枝当たりの着果数目安 】

通常果梗：3果/枝
かんざし果梗：4~6果/枝



通常果梗 かんざし果梗

図4 果梗形状に応じた摘果

(7) 炭酸ガス施用

- 換気が頻繁にされるようになると、炭酸ガス施用の効果が小さくなる。
- 日中ハウスを開放する時期（3月中下旬）を目安に施用を終了する。

(8) 病虫害防除

① ハダニ類

- 下葉の除去後、葉裏や葉縁に十分薬液がかかるように丁寧に散布する。
- ハダニの多発した株は、特に強めに葉かぎした後に防除をする。もしくは株ごと除去してハウス外に持ち出す。
- 葉かぎしたあとの残渣は、ハウス内に放置しない。
気門封鎖型薬剤の卵に対する効果はほとんど無いため、気門封鎖型薬剤は5~7日おきに複数回（2~3回）散布を行う。また、天敵にも影響があるため注意する。

② アザミウマ類（スリップス）

- 発生が少ないうちは、IGR剤（マッチ乳剤、カウンター乳剤等）で防除し、多発した場合には、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC等を用いて防除する。但し、天敵やミツバチへの影響が大きい薬剤もあるため注意する。
- ハウスの換気時間が長くなると、ハウス周辺の雑草からハウス内に侵入するため、ハウス周辺の除草を行う。

③ うどんこ病

- 夜温が上昇し、生育が軟弱徒長気味になると発生が多くなる。
- 電気加熱式くん煙器や、定期的な薬剤散布による予防に努める。

④ 灰色かび病・菌核病

- 多湿条件で発生が増加するため、曇雨天の前などは予防的な薬剤散布を行う。
- 発病後は、早急に被害果実を取り除き薬剤による防除を行う。

⑤ アブラムシ

- 暖かくなると急増するため、発生を確認したら速やかに防除する。
- ほ場周辺の雑草の除去を行う。
- 薬剤の選定に当たっては、ミツバチに影響のある薬剤もあるため注意する。

(9) 親株の管理

① 病虫害防除

- ・下葉の除去後、炭そ病とハダニ類の防除を行う。
- ・ランナー発生前から7～10日に1回を目安として薬剤散布を行う。

② かん水・施肥

- ・ランナー発生期の4～5月に乾燥すると、採苗時期の遅れや採苗本数不足の原因となるため、事前にかん水施設を準備する。
- ・プランターやポットは乾燥しやすいため、こまめにかん水を行う。
- ・プランターやポットの場合は、4月上旬までにIB化成S1号を1株当たり10粒、5月上旬までに1株当たり5～10粒の追肥を行う。

③ その他

- ・土耕ほ場では排水対策用の溝を必ず整備する。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！